

## 母性の素晴らしさ

神は人間を男と女にお創りになり、二人が一つに結ばれて子どもを産み、育てるようになさいました。子どもは**父と母の愛**の中で、神の愛を表わす人格へと育つようにお考えになったのです。では父親と違う母親の役割は何でしょうか。

キリストは「**憐れみ深い人は幸いである**」とおっしゃいました。この**憐れみ**はヘブル語では**子宮・胎**の複数形ラハミームという語が使われています。ユダヤ人は憐れみ深い人を「**子宮を幾つも持っている人**」と表現したのです。面白いですね。人間の体内には沢山の臓器があり、その働きによって自分の命が養われ、守られています。「しかし**ただ一つ**、自分の命ではなく、**他の命を養い育てる臓器**がある——それが女性にのみ備えられている**子宮**です」という解説を読みました。

私たちは口から食べ物を取り入れ、胃袋で消化し、腸から血液を通して栄養素を体内に送り出します。肺で呼吸し、心臓で血液を体中に循環させます。その他にも沢山の臓器がありますが、どれも皆、自分の命のために働いてくれる臓器です。しかし**子宮（胎）**だけは違う。自分の命ではなくて**他の人間の命**を育てるために働いている臓器なのです。

更に私の心を惹いたのは「子宮は、どんな命でも**選り好みしないで受け入れ**る」という言葉です。誰でも「このような子どもを持ちたい」という願望を持っています。でも**母の胎**は命を宿す時に、入学試験をしません。将来どんな人になるか全く見当がつかないまま、**無条件で受け容れ**、10ヶ月間抱き続け、自分の血と肉と命までも分け与えるのです。まさに**慈悲そのものを表わす素晴らしい臓器**ではないでしょうか。

そして生まれてからも、命が育っていくには、長い年月にわたる**世話**が必要です。何一つ出来ない赤ん坊を忍耐強く育てて行く**原動力が愛**です。その愛を神さまは先ず**母性に備え**、命を託されたのでした。私たちが母性に惹かれるのは、まさに**憐れみ**そのものの働きをする母の胎内で育てられたからなのですね。神の創造の業の神秘さに、頭が下がります。

## 母のふところ

聖書には次のような歌が記されています。

“かえって、乳離れしたみどり子が、  
その母のふところに 安らかにあるように、  
わたしは我が魂を静め、かつ安らかにしました” (詩編 131 : 2)

“あなたはわたしを生まれさせ、  
母のふところにわたしを安らかに守られた方です” (詩編 22 : 9)

生れ出た子どもたちは、**母のふところ**の中で、**魂の平安**と**信頼感**を養われ、**情緒が安定**していきます。そしてこの情緒の安定が、穏やかで心の広い人格形成の土台になっていきます。

2才から3才の子を持つ母親 6000 人の調査で、**子育ては辛い : 90%、子どもが可愛いと思えないことがある : 80%**とありました。結婚前に保育士をしていた2才の男の子の母親の言葉が、心に突き刺さりました。「子どもをぶつならお尻より下をと決めていた。そのうちに頬や頭をぶち、蹴ったこともある。子どもを少しずつ**嫌いになり始めている自分が怖かった。**」

自分の体の中にある「**憐れみ深さ**」そのものの働きをする子宮(胎)に、選り好みしないで受け入れ、自分の血や肉を与えながら10ヶ月間抱き続けて生み出した子どもなのに、殴ったり蹴ったりするとは一体どうしたことでしょうか。それは母胎という臓器自体が自然にそのように働いてくれたからであって、**母親自身の心の営み**ではなかったからにほかなりません。

ですから、子どもを生み育てているから、当然**母性が備わっている**はずだということにはならないのですね。

ですから母親は、先ず自分の内に**母性を養い育てていく**必要があります。どんな命でも**選り好みしないで受け入れ**、抱き続けて養う**母のふところ**の素晴らしさを自覚して、幼児を育てていただきたいものです。**この子**を自分が選んで胎内に入れたのではありませんでした。子も自分で**母親を決めた**のではありませんでした。**神がお決めになった親子の絆**です。神の御心を聞きながら、神から託されて**宝**として、育てて頂きたいものです。